

# 筑波大学名誉教授の会会報（一般用）

第 25 号 2020 年 8 月発行

## 発達障害の早期支援

坂田由美子

### はじめに

『発達障害』という言葉聞いて、どのような概念を持たれるでしょうか。発達障害は外見からはわかりにくく、その症状も十人十色です。そのため発達障害の特性を「わがまま」「自分勝手」「困った子」等と誤解して捉えられることもあります。日本で『発達障害』の概念を広めるきっかけとなったのは、2005年に制定された発達障害者支援法です。この法律の制定をきっかけにメディアなどでも発達障害が頻繁に取り上げられるようになり周知されるようになりました。支援制度も徐々に整備されつつあり、発達障害者の働く場も広がってきています。しかし、法制定から15年が経過しようとしています。発達障害の理解が正しく周知されているとは言い難い現状があります。発達障害は早期支援で社会生活に適応できるようになります。しかし適切な支援が行われない場合、日常生活での支障が増大したり、いじめ、不登校、うつ状態、パニック障害などの二次障害が生じたりすることがあります。二次障害から不登校や引きこもり状態になる場合も少なくありません。引きこもりの親の会による調査<sup>1)</sup>では、14歳から51歳の引きこもり332名のうち発達障害（疑いを含む）のある者は、男性26.3%、女性15.8%という結果でした。2012年に文部科学省が行った調査<sup>2)</sup>では、通常学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒の割合は6.5%ですので、引きこもりにおける発達障害の割合は高い状況にあります。そして引きこもりのまま成人となり、親とともに高齢化していく現状が現代社会の課題の1つとしてクローズアップされています。その一つの象徴的な出来事として、発達障害の子どもを父親が殺害するという悲しい事件も起こっています。そのような悲劇を起こさないためにも早期からの支援が必要です。そこで発達障害の早期支援の必要性と共生社会について考えてみたいと思います。

### 発達障害とは

発達障害の定義は、発達障害者支援法に『自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるものをいう。』と規定されています。発達障害者についても『発達障害がある者であって発達障害及び社会的障壁により日常生活又は社会生活に制限を受けるものをいい、「発達障害児」とは、発達障害者のうち十八歳未満のものをいう。』と発達障害者支援法に定められています。

疾病の診断基準としては『ICD-10 (International Classification of Diseases: 国際疾病分類第 10 版)』の「心理的発達の障害」「小児<児童>期及び青年期に通常発症する行動及び情緒の障害に含まれるもの」および、『DSM-5 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: アメリカ精神医学会、精神障害の診断と統計マニュアル)』による「神経発達障害 (Neurodevelopmental Disorders)」を発達障害として厚生労働省は定義しています。従来の DSM-IV では、先天的な脳の障害によって広範な領域に生じる発達上の障害を「広汎性発達障害 (Pervasive Developmental Disorders: PDD)」という概念で表現していました。しかし、2013 年に改訂された DSM-5 では、自閉症とアスペルガー障害を区別する妥当性が薄かったことから広汎性発達障害は廃止され、自閉性障害、アスペルガー障害、特定不能の広汎性発達障害等を「連続体(スペクトラム)」として捉えた自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: ASD) という診断名になりました。

発達障害は生まれつき脳の発達が通常と異なり非定型であることは明らかになっていますが、その原因や機序は未だ明らかではありません。

#### 我が国における発達障害者を支援する法律の変遷

- |              |  |
|--------------|--|
| 1980 年 (S55) | 知的障害児施設の種類として新たに医療型自閉症児施設及び福祉型自閉症児施設を位置づけ  |
| 1993 年 (H 5) | 強度行動障害者特別処遇事業の新設 (実施主体: 都道府県)  |
| 2002 年 (H14) | 自閉症・発達障害者支援センター運営事業の開始 (広汎性発達障害者を対象とした地域支援の拠点の整備の推進)                                   |
| 2002 年 (H14) | 文部科学省の実態調査で、発達障害の可能性のある児童生徒が通常学級に在籍する割合が 6.3%と報告され、この結果が発達障害者支援法の制定、特別支援教育の実施に繋がっていった。 |
| 2005 年 (H17) | 発達障害者支援法の施行  |
| 2007 年 (H19) | 特別支援教育の実施 (従来の特殊教育に発達障害を加え特別支援教育となった)  |
| 2010 年 (H22) | 発達障害が障害者にふくまれるものであることを障害者自立支援法、児童福祉法において明確化  |
| 2011 年 (H23) | 大学入試センター試験の発達障害者への特別措置の開始  |
| 2012 年 (H24) | 文部科学省の実態調査で義務教育の通常学級における発達障害の可能性のある児童生徒の在籍率は約 6.5%と報告                                  |
| 2012 年 (H24) | 障害者虐待防止法施行   |
| 2016 年 (H28) | 発達障害者支援法の改定 (発達障害者の支援の一層の充実を図るための全面的改正。特に社会的な問題の解消)                                    |
| 2018 年 (H30) | 障害者総合支援法の改定 (雇用義務の対象に発達障害を含む精神障害者が加わり障害者雇用率も引き上げられた)                                   |

このように発達障害を支援する制度も少しずつですが整備されてきています。

### 発達障害のスクリーニングと早期支援

現在、発達障害は早期発見しても根本的に完治することは困難です。しかし、発達障害の特性を理解し周囲が特性に応じた対応をすることにより、また自分でも工夫することによって、症状を軽減し生活での困りごとを減らすことができます。そして発達障害の特性をプラスに働かせることもできるのです。そのためには早期に発見し早期からの支援が必要となってきます。日本では、市町村で実施されている乳幼児健康診査（発達障害がチェックできるのは、主に1歳6か月児健診、3歳児健診）が最初のスクリーニングの機会になります。

発達障害は落ち着きがない、育てにくい、言葉が遅れているなどの特徴がありますが、これらは通常の子どもの発達でも個人差としてみられるものです。また発達障害の症状の出現には年齢差もあります。発達障害の有無を早期に診断することは難しいものです。一般的にASDは1歳6ヵ月頃からその兆候が見られます。LDやADHDは1歳6ヵ月での発見は困難で、多くは小学校低学年で発見されます。乳幼児健診では診断はつかないが、発達において何となく気になる子どもはグレーゾーンとして経過観察などのフォローアップを行い早期支援に繋げていきます。ここで重要なのは、発達障害の診断の有無にかかわらず、子どものニーズや保護者のニーズに応じた早期からの子育て支援は、その後の成長発達を促し発達障害の困りごとの軽減や解消に繋がっていくということです。発達障害は同じ診断名でも年齢、発達状況、生活環境などによって一人一人異なります。一人一人の困りごとに沿って個別に支援することが求められます。

では早期支援によりどのような問題が軽減したり解消されたりするのでしょうか。早期からの支援は、コミュニケーションの発達の促進、家族のメンタルヘルスの向上、子どもが必要とするニーズの早期把握、子どもの安心感の獲得、子どもの健全な自己理解の育成などに役立ちます。なにより子ども自身が自分の特性を理解しているとそれをプラスにしようとする意欲や自信につながっていきます。発達障害が理解されずに、いつも注意されている状況だとセルフエスティームは低下し意欲もなくなります。周囲からは「変わっている子」「わがままな子」といった捉え方をされて、いじめ、不登校、うつ状態などの二次障害を引きおこすこともあります。早期支援は、発達障害の特性を強みにして生活上の困りごとを少しでも解消するために、また二次障害を予防するために行われます。自分の得意分野を発揮して社会適応もできていきます。

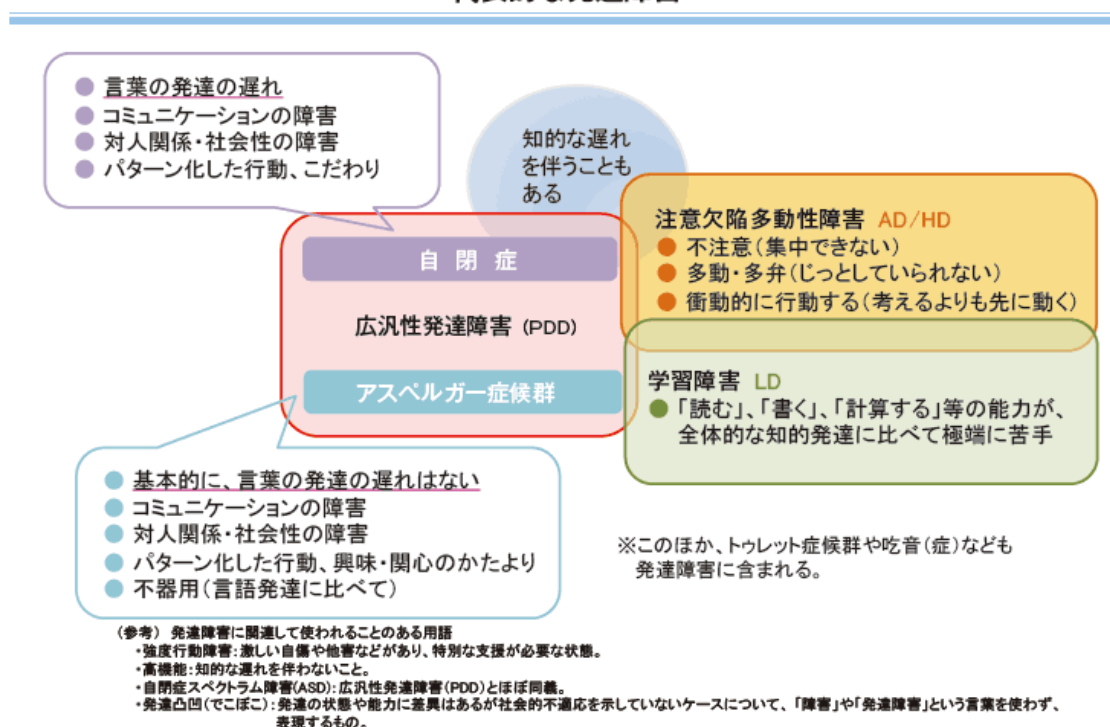
### 発達障害の特性と配慮のポイント

発達障害は広汎性発達障害（自閉スペクトラム症）、学習障害、注意欠陥多動性障害、その他の発達障害に分類されます。発達障害は単独の場合もありますが、なかには複数の発達障害を合併したり、知的障害を合併したりする場合があります。発達障害の特性は次

ページの図に示すように障害によって異なります。また特性から生じる生活上の困りごとは、年齢や環境などの影響もうけるため一人一人異なってきます。このような日常生活上の困りごとを最小限にすることにより、発達障害者／児は社会生活に適応していくことができます。そこで、生活上の困りごとを最小限にするために発達障害の特性と配慮のポイント<sup>3)</sup>をまとめてみました。

■ 図表2-14

### 代表的な発達障害



出典：内閣府 平成 29 年版障害者白書

自閉スペクトラム症（自閉症・アスペルガー症候群を含む広汎性発達障害）の主な特性は、①相手の表情や態度などよりも文字や図形、物の方に関心が強い、②見通しの立たない状況では不安が強いが、見通しが立つ時はきっちりしている、③大勢の人がいる所や気温の変化などの感覚刺激への敏感さで苦勞しているが、それが芸術的な才能につながることもあるなどがあげられます。これらに対する配慮のポイントとして、①「〇〇をしましょう」といったシンプルな伝え方、その人の興味関心に沿った内容や図・イラストなどを使って説明するなど肯定的、具体的、視覚的な伝え方の工夫をする、②手順を示す、モデルを見せる、体験練習をする、新しく挑戦する部分は少しずつにするなど、スモールステップによる支援をする、③感覚過敏がある場合は、イヤーマフを活用する、大声で説明せずホワイトボードで内容を伝える、人とぶつからないように居場所をつい立てなどで区切る、クーラー等の設備のある部屋を利用できるように配慮するなど、音や肌触り、室温など感覚面の調整を行うことなどがあげられます。

学習障害の主な特性は、「話す」「理解する」は普通にできるのに、「読む」「書く」「計算する」ことが努力しているのに極端に苦手なことです。これに対する配慮のポイントは、①得意な部分を積極的に使って情報を理解し表現できるようにする、例えば ICT を活用する際は、文字を大きくしたり行間を空けるなど読みやすくなるように工夫する、②苦手な部分について課題の量や質を適切に加減する、柔軟な評価をするなどの配慮があげられます。

注意欠陥多動性障害の主な特性は、次々と周囲のものに関心を持ち、周囲のペースよりもエネルギーに様々なことに取り組むことが多いということです。これに対する配慮のポイントは、①短くはっきりとした言い方で伝える、②気の散りにくい座席の位置の工夫、わかりやすいルール提示などの配慮をする、③ストレスケアとして、傷つき体験に寄り添い、適応行動ができたことへのこまめな評価をするなどがあげられます。

まずは本人を理解することが大切です。本人をよく知る専門家や家族にサポートのコツを聞くことは、全ての発達障害を支援するときに共通する配慮のポイントです。

## 共生社会に向けて

発達障害はその特性から家族や周囲の人が困っていると思いがちですが、最も困っているのは発達障害者本人です。困りごとを軽減し障害のない人と同じように学習をしたり、仕事をしたりするための社会的配慮は、障害者差別解消法に『合理的配慮』として規定されました。つまり障害の有無にかかわらず、すべての人の人権が平等に守れるように、一人一人の特性や場面によって生じる困難を除外するために調整や変更をすることを合理的配慮とすることができます。厚生労働省『平成 28 年生活のしづらさなどに関する調査』によると、発達障害と診断された者は推計で 48 万 1 千人です。生活のしづらさが生じ始めた年齢は「0～9 歳頃」26.8%、「10～17 歳」7.7%で、18 歳未満と回答した割合が 34.5%を占めています。発達障害による生活支障が解消されることは難しいですが、軽減はできます。軽減するためにも早期からの支援が求められます。

筆者が行った全国公立小学校の調査では、発達障害の可能性のある児童が在籍している学校は 93.9%とほとんどの学校に在籍していました。在籍率は 8.0%（中央値）と文部科学省の調査結果より高率でした。これらの子どもたちが自分の能力を最大限発揮できるように合理的配慮を行いながらともに学びあい育ちあう共生社会の醸成が今後も求められています。現在文部科学省科学研究費で発達障害の早期支援に関する研究を行っています。より充実した早期支援に貢献できるように研究を継続していきたいと思えます。

参考文献：1) NPO 法人全国引きこもり KHJ 親の会、「引きこもり」の実態に関する調査報告書⑧、2011 年 3 月

2) 文部科学省、通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について、2012 年

3) 厚生労働省、発達障害の特性（代表例）

## つくばマラソン報告記

佐々木 建昭

まずは自己紹介から。私・佐々木建昭は、昭和21年4月1日生の73歳。1991年4月に理化学研究所・情報科学研究室から本学・数学系に赴任して参りました。人事選考における『本学における教育方針』を書く欄に要約すれば「文武両道を貫く」と書いて、その言葉どおり、陸上同好会の顧問に就任し、毎年、つくばマラソンで学生や院生、ときには教員たちとボウズを賭けてマラソン勝負をしてきました。それは、現役教員であったときのみならず、定年後も続けてきました（本年は勝負してくれる学生がいなくてボウズ頭が途切れしました）。

そんな野蛮でヤクザな私が本文を書くのは、つくばマラソンの約2週間後に自然学系裏のループ道路をコーヒークップを手に散歩している時、大嶋会長と旧知の新井達郎さんに出会い、「名誉教授の会・ホームページへの寄稿依頼の手紙を読んだか？」と問われ、「そう言えば手紙がきてたけど多忙で封を切っていない」と言ったが、「佐々木さんならいくらでも書けるだろう」と、ウムを言う間もなく押し付けられたからです。

そこで、如何に手を抜くかを考えました：そうだ、マラソンレポートならいくつもあるから、日々、肉体の衰えを実感されてるお年寄りを元気づけ、健康維持に寄与しそうなレポートをまとめて添付文書とし、簡単な前文をつけてお茶を濁そう、と。添付文書は以下の三つです。

添付 A) 昨年10月に実行した『伊能忠敬を偲ぶ利根川リレーマラソン』。

因みに伊能忠敬は『中高年の星』とか『2度の人生を生きた人』と言われ、正にわれわれ研究者の鑑ともいべき偉人です。

添付 B) 上記マラソンに始まる不運の連鎖を書いた自嘲文『あのジーサン、あたまオカシイんちゃうか?』。面白いこと受け合いです。

添付 C) 本年11月に行われた『つくばマラソン報告記』。上記の不運の連鎖でヘルメットなしでは練習もできなかった古希老人が、絶対に無理なはずの復活練習に挑戦し『為せば成る』を実践しました。

三つを読み通すと、元気がでてくること受け合いだと思います。

令和元年12月24日

注：本会報には『つくばマラソン報告記』を掲載いたします。『伊能忠敬を偲ぶリレーマラソン記』と『あのジーサン、あたまオカシイんちゃうか?』は筑波大学名誉教授の会ホームページで閲覧することができます。

拝啓 先輩友人諸兄姉さま

令和1年12月08日、佐々木建昭

2週間前の11月24日(日)、恒例のつくばマラソンに出場しました。

正式タイムは3時間48分35秒(実質タイムは3時間48分19秒)です。

昨年10月、伊能忠敬リレーマラソン(理研走友会主催)で張り切りすぎて脱水症を起こし(朝6時の朝食から11時頃まで水分を摂取せずに9時から2時間ほど走ったため)、その1週間後には長距離練習中に石畳道路でコケて右頬骨を石畳にぶつけ(当然出血してハロウィン顔に)、さらに12月初旬には別の石畳道路でコケて右頬骨を再度ぶつけるなどして恐怖心が生じ、一時はヘルメットなしでは練習も出来ない状態になっていたのが、よくぞここまで回復したと少々感激しています。

多くの方が「どうやって回復させたか?」を知りたいでしょうから、まずそれを簡単に記述します。石畳道路でコケた理由は、足が地面からよく離れていなかったからです。私は以前は足で地面を強く蹴って歩幅を大きくする走法でしたが、還暦を過ぎるとその走法では故障し易いので、地面を強く蹴らない“省エネ走法”に変更していました。加えて、マラソンの後半では太腿が疲れて足がますます上がらなくなり、小さな突起物でも躓いてコケるのです。であれば、解決策は昔の走法に戻すしかないだろう。誰もが「老人には絶対に無理だ」と言うに違いなく、私も自信はなかったが、やるしかないと決断した。昔に戻す方法は、コケる可能性が少なくてもコケても頭に致命傷を負わないだろう陸上競技場で、短距離の全力疾走を行うのが良いだろう。短距離全力走では誰も腕を振り腿を高くあげて地面を蹴るはずだから。そこで私は、週に6回の学内ループ走に加えて、週に一回は陸上部員がほぼ練習を終えた陸上競技場で、百米の全力疾走を繰り返した。(ある日、競技場内におられた体育系名誉教授の村木先生から、「腿を鍛えるには全力疾走よりも80%ほどの力で走った方が効果がある」とアドバイスを頂き、以後はその助言に従った)。以上は、9月上旬までの話。9月中旬に外国出張から帰国すると、長距離練習が中心になり短距離全力走は疎かになったが、何か物足りない。そこで、耐震工事のために11月初旬に数学物理棟から化学地球棟に引っ越したのを機に、階段の登りは一段飛ばしで行うことにした。これらにより走法がある程度だが昔に戻ったようで、暗い夜道やデコボコ道を走る際の恐怖心が大幅に薄れた。

マラソン当日は、早朝こそ小雨だったがスタート時には本降りになった。しかし、雨は発汗を防ぎ喉の乾きを抑えるので、気温が低くさえなければ、雨天はマラソンには好条件であるはずだ。私は還暦以降は、8月下旬から毎週1回の長距離練習を行い(以前は毎週2回行ったが、59歳時に大故障した)、その距離を2週間に5キロずつ伸ばしていき、結果として、35キロ以上の練習を複数回行うのが良いタイムをだす必要条件だと考えている。なお、レ

一ス前の13日間は基本的にきつい練習はしない。だが、今年は例年以上に研究面で時間をとられ、しかも9月下旬に田舎に帰省する必要が生じて、例年より短期間で走行距離を伸ばさねばならなくなった。そのため、今回の最長練習は2週間前の35キロ走が1回のみだった。いつの練習でも、伸ばした最後の5キロでは足がよく動かなくなるのだが、今回はふくらはぎがツリそうだった。本番では必ず同じことが起きるはずである。

私の走り方は時計をあまり気にせず、前半はやや遅めの一定ペースで走り、後半は体調と相談しながら、若い頃はスピードをあげ(前半は5キロ約20分で、後半は一気に約18分ほどに上げた)、近年はその場凌ぎでスピード低下の抑止に専念する情けないものになっている。しかも、昨年も一昨年も32~33キロ付近から走りが蛇行するようになっていた。太腿に力が入らず、一步ごとに体がぐらついていたのである。ところが、今年は蛇行することがなかった... 嬉しかった。陸上競技場での全力疾走が効いたに違いない。その代り、危惧したとおりふくらはぎがピクつき始めた。痙攣を起こすと何度も起こし、その度に立ち止ってストレッチング(筋肉を伸ばす体操)で痙攣を止めなければならない。以後は、痙攣を起こさないギリギリのスピードで走ることに専念した。... スピードは少しずつ落ちていく... 時計をみたら4時間以内では走れそうになかったが、ふと思い出した：そうだ、私はE組で9時10分にスタートしたので、手元の時計で1時10分前にゴールすればいいのだ、と。現金なもので、たったこれだけのことで急に元気になった。さらに太腿は最後まで動いたので、ふくらはぎは痛かったが、体全体としては(マラソンレースにしては) 楽だった。ゴール時にゴール横に置いてある時計を見たら、午後1時には1分以上も余裕があった。

以下に5キロごとのラップタイム(比較のため昨年度と一昨年度も)示します。1年毎のタイム低下が一目瞭然ですが、本年度は終盤の落ち込みが少ないですね。

#### 5キロごとのラップタイム(区間時間)

05km	26分48秒	15km	25分56秒	25km	25分57秒	35km	28分11秒
10km	26分00秒	20km	26分01秒	30km	26分30秒	40km	29分44秒

#### 昨年度のつくばマラソンでのラップタイム

05km	25分38秒	15km	25分37秒	25km	27分01秒	35km	34分05秒
10km	25分28秒	20km	25分45秒	30km	30分03秒	40km	42分21秒

#### 一昨年度のつくばマラソンでのラップタイム

05km	25分22秒	15km	25分03秒	25km	25分37秒	35km	34分03秒
10km	25分10秒	20km	24分53秒	30km	26分48秒	40km	35分32秒



補記：今年も遠方から筑波大学陸上同好会のいつもの卒業生メンバーが駆けつけてくれた。嬉しい限りである。その中で最も古手の者二名は私が45歳で筑波大学に赴任し、2年後に同好会顧問に就任した当時の学生で、私が最初にボウズを賭けてマラソン勝負をした者たちである。その中の一人がしみじみ言った：俺らも初めて会った時の先生と同じ歳になったなー、と。全力をかけて勝負したことが産む絆の強さに感嘆するとともに、教師冥利に尽きる至福なことだと思った次第である。

## \*\*\*\*新入会員から\*\*\*\*

【2019 年度】

加藤久男（数理物質系）

1973 年 4 月東京教育大理学部数学科入学から 2019 年 3 月退職までのほとんどの時間を筑波大学で過ごしてきました。数理物質系では数学域に属し、トポロジーと位相力学系の研究に携わってきましたが、退職後もまだ研究したい課題が残っております。現在、幸いにも自宅が大学の近くですので、散歩がてらに大学に来て研究を続けております。皆様には大学周辺で姿を見かけるかもしれませんが、その時はよろしくお願ひします。

木下太志（人文社会科学研究科、グローバル・コモンズ機構（旧留学センター））

私は人類学と人口学を専門とし、上の部署で 2002 年以来計 17 年間、お世話になりました。何とか大過なく勤め上げられたという安堵感を感じるとともに、これまで当然と思ってきた、学生や他の先生たちとの交流を失った寂しさを感じているというのが現在の率直な気持ちです。今後は、これまで忙しさにかこつけてやり残してきた研究を推し進めるとともに、筑波大学にお役に立てることがあればやっていきたいと考えています。

園山繁樹（人間系）

2002 年 1 月から 2019 年 3 月まで人間系障害科学域でお世話になりました。特別支援教育分野の学士、修士、博士の人材育成は大変やりがいのある仕事でした。人間総合科学研究科では多様な分野の先生方との交流により、視野が大きく広がりました。2019 年 4 月からは縁あって出身地の島根県立大学で同様の人材育成に関わりながら、最後の仕事として場面緘黙の支援方法開発に取り組んでいます。

高橋正雄（人間系）

平成 8 年に東大医学部精神衛生学教室から移り、筑波大学には 23 年お世話になりました。専門は精神医学、特に天才を精神医学的に研究する病跡学です。ただ、従来の病跡学が天才の精神医学的な診断を中心にする学問だったのに対し、人は病や障害を抱えながらも偉大な業績をなすうることを示し、人生において病や障害が持つ意味や役割を考える新たな病跡学の確立を目指していますが、未だ道遠く、退職後も研究三昧の日々です。

### 玉川信一(芸術系)

31歳から65歳まで筑波大学芸術系で教育研究に携わりました。その間、澁瀨とした学生達の多様多彩な個性に触れることができ、自身の洋画制作にもずいぶん刺激的だったと今になって懐かしく思い返しています。退職して念願の制作三昧の毎日になりました。1年たっても未だにペースが掴めたとは言い難いところですが、自由な時間が増えて充実した画家人生が送れそうです。

### 坪井康次 (医学医療系)

1980年に第一回生として筑波大学医学専門学群を卒業、医学医療系脳神経外科講師と3年間の米国留学を経て2006年に陽子線医学利用研究センター教授に就任し、2019年3月に1年早くに退官しました。この間、主に脳腫瘍と陽子線治療の基礎的臨床的研究に従事し、学生時代も含めると筑波大学に40年以上在籍したことになります。2019年4月につくばセントラル病院の腫瘍センター長に就任いたしました。今後は微力ながらサイバーナイフ治療の発展と人材育成に貢献してゆきたいと思っております。

### 松田ひとみ (医学医療系)

18年間筑波大学でお世話になり、平成30年3月に早期退職しました。学際系のヒューマン・ケア科学専攻では、高齢者ケアリング学分野において看護師等の様々な専門職の学生たちと研究活動を行いました。主な研究は、睡眠ケア法の開発と起立性低血圧予防のためのオノマトペ効果を検証することです。今思うと大変恵まれた環境で過ごすことができました。現在は、札幌でホーム・ホスピス in 北海道の設立に向けて努力しています。

### 丸山幸夫 (生命環境系)

2003年4月に農研機構から筑波大学に移り、2019年3月に定年退職しました。農林水産省および関連法人では稲・米の研究に携わってきましたが、大学では作物学の教育と研究を担当する傍ら管理職を兼任する機会があり、学内の様々な分野の方々にお世話になりながら貴重な経験をさせていただきました。今後は学外の各種委員会の仕事を続けながら、食糧や農業の問題を考えていきたいと思っています。

## 山田 務（ビジネスサイエンス系）

公正取引委員会に勤務後、筑波大学にお世話になり、2019年3月に退職いたしました。筑波大学では東京キャンパスの社会人向け大学院において、独占禁止法を中心とする経済法分野の教育・研究に携わりました。恵まれた環境の下で、実務経験を基に、体系的な研究を進めることができ、また、社会人学生の方々と学び合うことができたことを大変ありがたく思っております。微力ながら、引き続き、社会に貢献できればと思っています。

### 【2020年度】

## 岩崎美紀子（人文社会系）

カナダから帰国後、1986年9月から2020年3月まで33年7ヶ月にわたり、国際関係学類・国際総合学類で比較政治学や社会科学方法論、カナダ政治などを教えました。学生たちが方法論を習得するなかで見違えるような成長を遂げ、密度の濃いゼミを行えたことが、筑波大学を離れられなかった大きな理由の1つです。研究テーマは、連邦主義、自由貿易、地方分権・広域行政、二院制議会などで、最近は選挙制度について比較政治学の視点から取り組んでいます。

## 逢坂卓郎（芸術学系）

2004年より筑波大学芸術学系総合造形へ入り、2020年に退職するまでお世話になりました。東日本大震災の被災地を支援する、学際的な「創造的復興プロジェクト」での多くの人々との協働は深い体験となりました。2013年からEMPに参加し、留学生を含めた多領域の学生と弾道飛行による無重力芸術の実験を行いました。今後は専門の光芸術の世界を更に探求し、JAXAとの共同研究も続けて参ります。

## 金谷 和至（数理物質系）

1988年に「筑波大学Sプロジェクト」の任期付助手として着任してから、2020年3月に定年退職するまで、32年ちょっとの大きな時間を筑波大学でお世話になりました。その間、QCDPAX、CP-PACSなどの専用計算機開発に参加しながら、素粒子の理論研究を行い、また、計算物理学研究センターとその後継の計算科学研究センター、及び数理物質融合科学センターとその後継の宇宙史研究センター（朝永センター）の立ち上げなどにも関わらせていただきました。様々な分野の優秀な人たちとの共同作業は刺激的で、大きな勉強になりました。適度に大都市から離れていて、研究環境も生活環境も、つくばは良い所

だと思います。新型コロナの影響で、今の所ほとんどつくばの自宅で巣籠もりですが、朝永センターのサポートや研究のやり残しを進めるために、まだしばらくは筑波大学にも出沒することになっています。

#### **本田 靖（体育系）**

研修医を終えた後、主にマクロな観察研究を続け、国立環境研究所では気候変動の健康影響を研究しておりましたが、ご縁をいただいて 1998 年に体育系に赴任しました。在任中、環境保健学などを教えながら、気候変動に関する政府間パネル報告書の著者、WHO コンサルタントなど、貴重な経験をさせていただきました。現在、再び環境研究所で客員研究員として気候変動の適応策研究に取り組んでおります。

#### **松村 明（医学医療系）**

1974 年に筑波大学第 1 期生として医学専門学群入学後、本年 3 月まで 46 年間筑波大学でお世話になりました。学群卒業後は筑波大学附属病院レジデント（脳神経外科）を経て、26 年前に講師になり、その後 16 年間教授を努めました。教授就任後は副病院長を 7 年、病院長を 4 年とかなりの時間を病院運営に費やしました。附属病院では卒前・卒後教育、臨床研究・産学連携、国際連携などに携わりました。研究としては国際総合戦略特区事業などで「中性子捕捉療法用病院内小型加速器」の研究開発を行うことができ、充実した 46 年間でした。4 月からは「茨城県立医療大学・学長」として大学運営全般に張り切っております。

## \*\*\*\*会長より会の現状報告\*\*\*\*

大嶋建一

一昨年10月25日の総会にて、現在の幹事体制が発足して以来、早や2年近く経過致しました。昨年5月発行の会報24号（昨年5月発行）では「会長就任の挨拶」を、HPでは本年3月27日付けの記事「会長からの近況だより」にて会の活動を報告しました。以下では、これらの記事と重複するところもありますが、会の現状を報告いたします。

1. 最初に取り組みましたことはホームページの充実です。例えば、「筑波大学名誉教授の会」(<https://eprofs-univ-tsukuba.org/>)とネット検索していただきますと、「おしらせ」、「音信（近況、随筆、寄稿等）」をパスワードなしで見ることが出来ます。特に、皆様からの「音信」は歓迎しますので、ぜひ投稿して下さい。その投稿規定は「音信」をクリックしていただき、2019年12月27日の井田哲雄先生の記事“投稿へのお勧め”から得られます。さらに、メール会員の方にはすでにパスワードをお送りしていますので、ログインしますとより多くの情報を得ることが出来ます。

2. 会の活動の活発化のために、一昨年の7月から始めました「つくば談話会」は情報の伝達が十分ではありませんでしたので、当初の出席者は10数名でした。そのために、本年2月20日に開催しました第5回目の会の案内はメール会員の方全員に送付致しました。第6回目として、6月18日には長洲南海男先生が「STEM教育とは？—教育におけるパラダイム変換」という題目のお話をお聞きする会を計画していましたが、新型コロナウイルスの感染防止のために、本年秋以降に延期することになりました。今後、話題提供をしてくださる先生がおられましたら、庶務担当の白川友紀先生にご連絡して下さい。なお、つくば談話会の開催にあたり、つくばエキスポセンターおよび茗溪会から共催または協賛が得られていますので、私たちと多くの方々とのつながりが深まることが期待されます。なお、第3回から第5回までのつくば談話会の詳細は本会報18-19ページに記述されていますので、お読みくだされば幸いです。

3. 昨年末には茗溪会の理事を務めています編集担当幹事の新井達郎先生の仲立ちにより、茗溪会との連携が結ばれました。その連携に関する記事は茗溪会の季刊誌「茗溪」（2020年正月号、No.1104、P18）に掲載されていました。「茗溪会」をネット検索して下さいればこの記事を読むことが出来ます。この中では“教育連携”を通じて名誉教授の先生方に加わっていただくことを提案していますので、先生方の活躍の場が増えれば幸いです。

っています。なお、この記事は本年3月27日付けの「会長からの近況だより」にファイルを添付しましたので参考にして下さい。

以上、主だった事項を述べましたが、本年上半旬に発生しました新型コロナウイルスは世界中で猛威を振るい、未だに日常生活が戻ってきていません。そのため、来夏に延期されました東京五輪をはじめとして、ほとんどの行事が延期や中止となっています。その中で、筑波大学での春学期の授業は従来型の対面授業からオンライン授業になりましたので、学生は入構する必要がありませんので学内は非常に静かです。このような状況がいつまで続くのかは予想できませんが、今後新しい学習方式が多くなることでしょう。

最後になりますが、本年秋の総会の開催の方式について、幹事会にて開催の方法について相談し、現状では対面ではなく、書面による開催ということで、了解が得られました。今後、役員の皆様には書面による開催を提案しまして、了解をしていただくことにしています。

今後もしよろしくお願いたします。

(2020年7月31日)

**\*\*\*\*筑波大学名誉教授の会 叙勲受章者\*\*\*\***

2019年度の叙勲の名誉に浴せられた会員は次のとおりです。誠におめでとうございます。

○ **2019年度春の叙勲**

瑞宝賞（瑞宝中綬賞） 神田 護（かんだ まもる） 79歳  
数学系

○ **2019年度秋の叙勲**

瑞宝賞（瑞宝中綬賞） 田畑孝一（たばた こういち） 78歳  
図書館情報大学元副学長

瑞宝賞（瑞宝中綬賞） 阿部聖仁（あべ よしひと） 89歳  
物理学系

瑞宝賞（瑞宝中綬賞） 金子隆芳（かねこ たかよし） 91歳  
心理学系

**\*\*\*\* お知らせ \*\*\*\***

1) **2020年7月31日の会員数**

筑波大学名誉教授の会は昭和61年5月11日に発足し、総会の開催、会報の発行、更にはつくば談話会の開催等を行っています。なお、2020年7月31日現在で、557名の方が入会されています。

2) **第34回筑波大学名誉教授の会総会**

2019年10月25日（金）に筑波大学大学会館国際会議室で開催され、次のことについて議事説明、報告等が行われました。

- (1) 新入会員について
- (2) 役員改選について
- (3) 平成29年度会計決算及び平成30年度会計中間報告について
- (4) その他

総会に引き続き、前田清司先生（筑波大学体育系スポーツ医学・教授）より、演題「生活習慣と動脈硬化度」のご講演を頂きました。講演会終了後は、大学会館1階のレストランプラザで懇親会が開催されました。

3) **つくば談話会の開催**

- (1) 第3回つくば談話会



日時：2019年7月16日（火） 14:00～15:30

場所：筑波大学学生会館マルチメディア室

演者：門脇厚司先生（筑波大学名誉教授・つくば市教育長）

演題：異色の教育長体験記

(2) 第4回つくば談話会

日時：2019年12月12日（木） 14:00～15:30

場所：BiViつくば2階 筑波大学サテライトオフィス

演者：村上正秀先生（筑波大学名誉教授）

演題：人工衛星に搭載した極低温に冷やした望遠鏡で宇宙を見る

天体観測と言えば、望遠鏡を覗いて、目で見るとかフィルムや乾板に記録を残す、と言ったイメージがありました。対象とする天体からのシグナルもほぼ可視光に限られていました。しかし最近では、観測する波長は可視光以外にも、赤外線、紫外線、X線、ガンマ線にまで広がっています。ただ、そのようなシグナルの観測は地上の天文台からでは難しく、人工衛星など、いわば宇宙からの観測が必須です。さらにそこからの観測を高感度の極みともいえるレベルで行うには絶対0度に近い極低温にまで冷やした望遠鏡を使うことも必要です。

今回のお話では、宇宙からの極低温にまで冷やした望遠鏡を使って観測を行うべき理由は？それで何を観測するのか？その実現のためにはどんな新しい技術革新が必要であったのか、そしてそれを実現すべく既に打ち上げられたあるいは現在計画されている衛星プロジェクトにはどのようなものがあるのか、などについてふれます。この中で、無重力状態にある衛星上で長期に亘って極低温環境を保ち所望の機能を実現するためにどのような機器・装置開発が必要であったのかが今回の中心的テーマです。

(3) 第5回つくば談話会

日時：2020年2月20日（木） 14:00～15:30

場所：BiViつくば2階 筑波大学サテライトオフィス

演者：田瀬則雄先生（筑波大学名誉教授）

演題：水から診る持続可能性、環境問題 ―水の惑星の課題―

地球は「水の惑星」と呼ばれるように水の存在が地球システム、そして生命現象、人間活動をコントロールしています。しかしながらその水は地球上に遍在しておらず、時空間的に偏在しているため、多くのことが制限されます。私は、「水のない、安定的に確保できないところに持続性はない」と考えています。持続可能性という言葉が頻繁に使われていますが、水と

の関わりから、環境問題、生産活動などの話題をこれまで関わってきた調査・研究と関連しながらお話しし、広く地球環境問題などを考えるヒントを提供できればと考えています。

#### 4) 2020年幹事（任期はカレンダー年で設定）

##### 幹 事

会長	大 嶋 建 一	～R 4.12.31
副会長	八 代 勉	～R 4.12.31
副会長	井 田 哲 雄	～R 4.12.31
庶務担当	白 川 友 紀	～R 4.12.31
庶務担当	村 上 正 秀	～R 3.12.31
庶務担当	白 岩 善 博	～R 4.12.31
会報担当	新 井 達 郎	～R 4.12.31
会報担当	高 田 ゆり子	～R 4.12.31
会計担当	西 村 よしみ	～R 4.12.31

#### \*\*\*\* 編集後記 \*\*\*\*

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大防止のために、世界中がこれまでにない生活を強いられた2020年の始まりでした。COVID-19の感染予防のために、テレワークなどの新しい働き方やSocial（Physical） Distancingを保った新しい生活様式が導入されました。これまでの生活が今後大きく変わるきっかけにもなる感染症の出現で、国民性や民族性も垣間見えたような気がします。

そのようななかで本会報に原稿をお寄せいただいた先生方に感謝申し上げます。

巻頭言『発達障害の早期支援』を拝読し、発達障害で困っている本人・家族・関係者のもとに早期支援が円滑に適切に提供されるような共生社会の構築の必要性を改めて感じました。そして密接・密集・密閉にならないような支援提供の在り方という新しい課題もつけられたと思います。

また、『つくばマラソン報告記』は、佐々木建昭先生より2019年12月にホームページにご寄稿いただいた原稿です。会員の先生方に元気なメッセージが届く内容だと思います。より多くの先生方にお目通しいだきたく掲載いたしました。

新しく名誉教授の会に入会された先生方からのメッセージは、会報発行時期の関係から今回は2019年と2020年の2年間分の新会員のメッセージを掲載いたしましたので、ご高覧いただき、会員相互の情報交換の一助になれば幸いです。皆様からのご投稿もお待ちしております。（会報担当：高田ゆり子・新井達郎）

＜この会報一般用一は、会員用の会報から、会計関係と訃報に関する情報を削除してWEBの担当者が作成しました。八代）

